

## 書評・紹介

### Mary Anne Warren *Gendercide: The Implications of Sex Selection*

Rowman & Allanheld, Totowa, N.J. 1985, 209pp.

性別殺 (gendercide) とは「直接、間接を問わず、男子または女子の相対的減少を伴う男女差別的諸行為」を言う。広くは、戦争や男女差別、平均寿命の男女差という現象から、性別選好に基づく親の諸行為や直接的な男女産み分け (preconceptional sex selection) までを含む。

著者は、まずそのような広い定義の下で性別殺に関わる歴史的諸現象を押さえ、その中に、最も進んだ性別殺の技術、すなわち、男女産み分けを位置づける。そして、その道徳的是非と効用的是非を詳しく論じる。

第1章は、全体の展望である。フェミニズムの立場に立ちつつも、感情的にならず、可能な限り客観的な叙述を心掛けようとする姿勢が見える。

第2章は、歴史的な展望で、女乳児殺、女兒遺棄、中世の魔女狩り、性器切断等をレビューする。

第3章は、男女産み分けが進んだ極端な場合を想定し、男子または女子のみしか存在しない単一性別社会の可能性を論じる。

第4章は、早期妊娠中絶と人工的男女産み分けに対する道徳的・倫理的反対論を検討し、その根拠は希薄であることを主張する。しかし、妊娠後期の中絶に関しては、著者は道徳的にも反対の根拠があるとする。

第5章は、男女産み分けで男子が多くなった場合を想定し、その際の、最も大きな性別殺の結果、すなわち「暴力」の増加の可能性を論じている。本章の多くは、社会心理学者Secord等の研究を現実と照合して検討したものである。必ずしも、明確な結論に至ってはいないが、男子が多くなっても、社会に暴力性は必ずしも増加しないだろうと見ている。

第6章は、男女産み分けがもたらす社会的、人口学的結果の視点から論じ、次の8つの結果を示している。(1) 現実の性別役割の強化・拡大、(2) 第1子の男子過剰、(3) 男子中心の医学界への依存の増大、(4) 過剰男子の配偶者不足、(5) 売春の増加、(6) 男性中心主義的態度の強化による自然破壊の進展、(7) 性比不均衡の拡大がもたらす階級闘争の激化、(8) より危険な人間遺伝子工学の進展である。夢想的な展開もあるが、新鮮な発想を見せていると言えよう。

また、出生性比、したがって人口構造の性比も(一時的に)大きくなる可能性に言及する。そして出生性比は大きく変動しなくても、第1子が、男子過剰になるという予測を行っているが、特に注目に値するだろう。現在の性別選好のために、第1子が男子、第2子が女子という兄弟関係が非常に多くなるのである。坂井の個人的調査(1985年)によっても、若者の間では、回答者の男女を問わず、第1子に男子を、第2子に女子を希望する者が非常に多いという知見を得ている。そのような「一太郎二娘」が実現すると、同別居行動や家族構成にも影響が及ぶかも知れない。

第7章は、男女産み分けがもたらす社会的、人口学的長所を論じている。伴性病の予防、出生率の低減、親の幸福の増大、(望まれた子供だけしか生まれないことによる)子供の幸福の増大である。常識的な結論であるが、長所と短所を秤にかけて、男女産み分けを論じるべきであるとする。

第8章ないし終章は、視点を改めて、現在の性別選好を支持、助長する男女差別を撤廃する必要を言う。それが、ひいては、性別殺の減少につながる、と考えるからである。しかし、性別殺の要因の弱化は、法律的制限ではなく、あくまでも個人の選択に委ねるべきであると主張する。性別殺を法律で規制することは、個人の「出産の自由」を失わせることになり、性別殺そのものよりも道徳的にも、社会的にも悪影響があると考えられるからである。

以上のように、本書は、現在の子供の性別選好研究に、過去と未来の歴史的展望を与えてくれるだろう。

(坂井 博通)